100年に一度の変革期を迎える長崎

NT 長崎トヨタ

交流の拠点となってきた長崎トヨタ長崎本店。これからも長崎の文化を守り、まちづくりに貢献していく。

コーディネーター
長崎新聞社 代表取締役社長
徳永 英彦

アシスタント
俳優（chohai）
塩田 みう

▲長崎本店の店内にて撮影

長崎トヨタ長崎本店のグランドオープンを祝賀して、長崎トヨタ三代目代表取締役社長の金子直幹氏、長崎商工会議所会頭の森拓二郎氏、長崎市長の鈴木史朗氏、コーディネーターに長崎新聞社代表取締役社長の徳永英彦氏、アシスタントに俳優の塩田みう氏を迎え、和気あいあいとした雰囲気の中、「100年に一度の変革期を迎える長崎」をテーマに座談会を開催しました。長崎トヨタ長崎本店の役割や意義をはじめ、岐路に立つ長崎の変革や未来について存分に語り合っていただきました。

長崎の人、街とともに歩み、今年で創業79年。

徳永 本日はお集まりいただき、ありがとうございます。それではまず、長崎トヨタの歴史について金子社長にお聞きしたいと思います。

金子 長崎トヨタの歴史は、全国のトヨタ自動車販売店の創業年に当たる1946年に始まりました。長崎トヨタ自動車の創業者が私の祖父、金子道雄で、その前に佐世保市に拠点を置く「肥前トヨタ自動車販売」の支配人をしていた関係で、戦後、トヨタ自動車が全国の販売店を立ち上げる時にご指名いただき、この地で創業しました。

徳永 2024年の長崎くんちでは、五島町の庭見世会場として建設中のビルを開放されましたね。

金子 五島町の皆さまに奉納踊りの練習場としてご提供してきた関係で、町内の皆さまと交流を深め、地域のためになるのであればという思いから庭見世にも協力しました。本番でも五島町の皆さまと一緒にまちを歩き、長崎くんちを肌で体験しました。

▲長崎くんち（五島町）の庭見世会場としても地域に貢献する長崎本店

徳永 長崎市はここ数年、「100年に一度の変革期」と言われてきました。そのポイントとこの新本店ビルが建つ五島町など長崎駅南側の役割を教えてください。

鈴木 西九州新幹線の開業を契機に、長崎駅周辺は新駅舎、新駅ビル、MICE施設、「出島メッセ長崎」など完成し、さらに長崎スタジアムシティもできました。今後はこの新しい賑わいを、歴史と伝統があふれるまちなかをはじめ、市内全体にどう広げていくかが大切です。長崎本店のある五島町は、長崎駅と浜町方面のまちなかの途中に位置し、回遊性を高めるために重要なエリアだと考えています。

塩田 環境への対応について、長崎トヨタと長崎市ではどんな取り組みを行っていますか。

金子 トヨタ自動車は、脱炭素社会に向けたアプローチとして、多様な車を提供する「マルチパスウェイ戦略（全方位戦略）」に取り組んでいます。これは電気自動車（BEV）、燃料電池車（FCEV）、ハイブリッド車（HEV）、プラグインハイブリッド車（PHEV）に加え、通常のガソリン車のラインアップを揃えるものです。「プラグインアップメーカーとして、少しずつ段階を経て脱炭素社会とカーボンニュートラルを実現するというアプローチを選択しています。日本は自然エネルギーの自給率が極めて乏しい国です。日本全体にどのように電力を供給していくかという観点で、トヨタ自動車が進んでいる道は正しいと信じています。トヨタ自動車と力を合わせ、私たち販売店が地域での役割を担いながら、脱炭素社会の実現に向け、しっかりと取り組みを進めていきたいです。

鈴木 長崎市の取り組みとしては、サステナブル（持続可能）な街づくりを推進しています。例えば「歴史文化×夜景観光×脱炭素」のプロジェクトでは、環境省の脱炭素先行地域に認定されました。これは、東山手・南山手地区の洋館群やグラバー園、大浦天主堂など伝統的建造物のほか、稲佐山から見下ろす夜景を構成する照明のLED化などの省エネルギー化と使われる電力の再生可能エネルギー化を進める計画です。今後は産学官と市民が力を合わせ、「オール長崎」で全国に先駆けたモデルケースをつくっていきます。

▲長崎市「Zero Carbon Action Nagasaki」のロゴマーク

環境に配慮したカーボンニュートラルの取り組み。

塩田 皆さんが描く100年後の長崎について教えてください。

鈴木 やはり、100年後も市民が皆さんが「長崎で暮らしてよかった」と思えるような街であってほしいと願っています。新しい街の基盤を活用しながら、さらに魅力をつくっていけば必ずそういう街になると確信しています。

長崎は海洋県であり、港を中心に発展してきた街です。今後は海洋再生エネルギーや長崎港のカーボンニュートラルポート、持続可能な養殖業の実現を目指す「ながさきBLUEエコノミー」などが、世界に誇れる産業として成長してほしいです。それによってシビックプライド（市民としての誇り）にあふれ、人々が元気で輝く街になることを期待します。

金子 100年後の長崎は世界に魅力ある街になって、世界中から観光客や移住する人が増えることを期待します。新しい本店ビルの建設で使ったレンガには、近隣の小学3、4年生にそれぞれの夢を刻んでもらいました。彼らが二十歳になる10年後、ここに招待してお祝いをする企画があります。これからも地域の役に立てる取り組みを続け、自動車ディーラーとして、地域の足、地域の拠点として、末永く地域の皆さまにご愛顧いただける店づくりを進めていきたいと思っています。

▲子どもたちの夢が刻まれた長崎本店の実際のレンガ

▲長崎本店のレンガに刻む夢を書く長崎市立桜町小学校の生徒

▲長崎夜景のランドマーク施設群において景観・環境に配慮した街路灯のLED化などを実施

今後長崎に必要なもの、未来の長崎に対する想い。

徳永 今後の展望やまちづくりへの期待をお話しください。

鈴木 新しい街の基盤ができた長崎では今後、そのハードを活用し、人や企業、投資を呼び込むソフトをつくる努力が必要です。そのためにも、より質の高いサービスを提供し、消費を高め、経済を活性化することが求められます。そうすれば若者にとって魅力的な雇用が生まれ、人口も増えるはずです。暮らしも、仕事も、学びも、遊びも、すべてが楽しめる、市民がワクワクする街をつくりたいと思っています。

「100年に一度」と言われるまちづくりを契機に、長崎全体で地域資源の磨き上げに取り組む必要があります。長崎は和華蘭文化をはじめ、固有の歴史・文化が形成されてきた街です。長崎駅周辺の賑わいを街全体に波及させるためには、過去と現在が融合したまちづくりが求められます。そういった意味からも、今後は県庁舎跡地や市役所跡地の有効活用が非常に重要になると思います。

金子 私の夢は、長崎と福岡を世界一魅力ある街にすることです。そのために私たちができることは、世界中の人に、サービスが卓越した長崎トヨタに行ってみたい、「長崎トヨタで車を買ってみたい」「トヨタでサービスを受けてみたい」と思ってもらうことです。いわばこの新しい本店ビルが自動車業界のリッツカールトンのような場所になり、世界中から人が集まることで、長崎の街の賑わいに貢献したいと考えています。

塩田 金子社長は若い世代へ、車の魅力をどう伝えていきたいですか。

金子 インターネットの普及で、お客さまの車の情報収集やカタログ請求の仕方も変化しました。ただし、最終的に車を選ぶ時にワンクリックで一という人は基本的にいません。長崎本店のようなリアルの場が若者に選ばれ、「営業スタッフからいい提案をしてもらい、納得できる買い物ができた」と言ってもらえる、そんな人材育成もやっていきたいです。

長崎市と外部給電が可能な自動車を活用した災害連携協定を締結。

徳永 長崎トヨタを含む長崎県オールトヨタでは2021年、長崎市などと災害時に外部給電可能な車両からの電力供給に関する協定を結びました。今後はどのような役割を果たしたいとお考えですか。

金子 トヨタ車の強みはハイブリッド車（HEV）です。純粋なバッテリーEVと違い、自分で発電能力を持っていますので、災害時に十分活用できると思います。新しい本店ビルの完成を機に、今後はさらに防災面の取り組みや長崎市との連携協定も強化したいです。

徳永 鈴木市長は連携協定の意義をどうお考えですか。

鈴木 今やスマートフォンが貴重な情報源となるなど、被災地では水や食料と同じくらい電力も重要です。そういった意味では、トヨタグループ様と締結した「電気自動車等を活用した災害連携協定」は被災地への電力供給に大きく貢献することが期待され、市民の皆さまにとっても安全安心につながると考えています。

▲非常時に移動できる電源として使える「給電できるクルマ」
Photo：プリウスPHEV

企画・制作／長崎新聞社メディアビジネス局